

## 33 顕微解剖学の歴史、三浦梅園が愛用した木製顕微鏡

島田 達生

大分大学医学部看護学科健康科学

江戸中期の啓学者、三浦梅園（1772-1789）は、本名晋（すすむ）、字名安貞。彼は豊後国東半島の安岐の山里で天地を師として独目の条理学を極め、「玄語」「贅語」「敢語」の本を出している。梅園は哲学者や天文学者としてよく知られているが、実は彼は、代々続いた医師であった。梅園は東洋医学に加えて、西洋医学にも目を向け、中津や長崎にも遊学している。杉田玄白や前野良沢と同様に、人体の解剖にも興味を持っていたが、彼が解剖したのは人体ではなく、猫、犬、カエル等であり、動物のからだからヒトの構造と機能を理解することに努めた。彼の著である「造物余譚」はまさに比較解剖学書である。

三浦梅園資料館（大分県国東市安岐町富清）を訪ねて、一際目につくのは梅園が作った大きな天球儀であった。梅園の脳裏には輝かしい宇宙と世界が拡っていたのであろう。資料室に入ると、そこには当時の資料や彼の書籍が並び、彼の学問の広さと深さがうかがえる。多くの資料の中で特に演者が注目したのは、木製の光学顕微鏡であった。それは重要文化財であるために手を取って顕微鏡を見ることはできなかった。資料館の浜田氏は私に一冊の本「三浦梅園集、三枝博音編、岩波文庫」を手渡した。この本の中に梅園が長崎に旅行したときの紀行文「帰山録草稿」があり、この文章の中にこの木製顕微鏡のことが書かれていた。安永7年（1778）、梅園56歳の時に一行12名で、豊後富永村から長崎に出向いた。その距離83里（約320km）。当時長崎には有名なオランダ語の通詞吉雄耕牛がいた。耕牛が前野蘭化（良沢）の蘭語研究や杉田玄白らの「解體新書」の翻訳の仕事に寄与したことは広く知られていることである。梅園は長崎滞在中に天文学を学ぶかわら、何度も耕牛を訪ね、西洋の事情や西洋医学など新しい知識を取り入れている。

江戸中期、日本の医学・医療が人体の肉眼解剖書に目を向けていた時に、梅園は耕牛が所有していた。木製の顕微鏡に興味を示した。すでに、長崎にはヨーロッパ製（オランダ製またはイギリス製）の真鍮の顕微鏡が入っていた。梅園が所有し、愛用した木製の三本脚顕微鏡は翌年に耕牛から送られた和製のものとされている。和田歴史資料館にもこれと同じタイプのもので所蔵されているが、これは鏡体にきれいな模様があり、天明年間（1781-1789年）に製作されたものであった（平成16年2月23日の記念切手より）。よって、梅園資料館にある木製顕微鏡は日本で最も古い和製のものであろう。この顕微鏡は、全木製、白木、塗りなしで、全長25cm、鏡筒は円盤状であった。英国のカルペパーが1725年から30年間に製作したのも重三脚型であることから、これをまねて作ったものであろう。「帰山録草稿」にこのようなことが書かれている。見微鏡、むしめがね之。是にてみるに人の毛はひらみあり、小児の髪毛は中すく、けだもの毛はまるし、とうしみの切口はかくのごとく、大かひケ様なるものあり、大小みわけの目がね五ツあり。梅園は自宅の近くに栽培している七島蘭（琉球蘭ともいう）の断面を顕微鏡で見た。このスケッチはRobert Hooke（1635-1703 イギリス）がゴルクの断面を描いた多数の小孔（cell、細胞）に似ていた。梅園もフックと同様に鋭利なナイフで七島蘭のうすい小片を作り、これを顕微鏡で観察したのであろう。演者も同様な方法で七島蘭のうすいスライスをつくり、今の顕微鏡で観察した。